



小須戸ARTプロジェクト2018

作品を通して様々な切り口から小須戸地域の魅力を発信

これまで地域に関わった作家が住民との協働によりプランを実現。地域性が強く質も高い独自のアートプロジェクトを展開。作家が「人」・「モノ」・「場所」とそれぞれ異なる要素に着目したことで、作品を通して様々な切り口から地域の魅力を伝えた。

■ 飯沢康輔《小須戸の看板娘》

歴史を色濃く今に伝える小須戸の商店街も時代の流れとともに新陳代謝を繰り返し老舗と新興の店舗が入り交じりながら変化し続けている。それでも今も昔も変わらないのが人々を迎える看板娘達の笑顔だ。それは世代を越え地域を支える活気をもたらしている。作家が出会った看板娘達のもてなしの笑顔を大画面に描き、脈々と受け継がれる小須戸の息吹を伝える作品を制作。「町屋ラボ」で滞在制作を実施し、会期中にも作品が増設され、最終的に8作品が展示された。

■ 鮫島弓起雄《八百万シリーズ》

使い古された道具が神様になる町、小須戸。日本古来の「八百万の神」の概念に基づき、各家庭に残る役目を終えた道具や機械、長年使用し壊れてしまった部品や捨てられた物、ジャンク品などを素材とし、かつて

それがどのように使われていたかのエピソードなどを踏まえ作品化した。11作品を6会場に分散させ、ひっそりと置かれた作品をパンフレット片手に探すことでまち歩きの楽しみにもつながった。

■ 南条嘉毅《町屋ラボ》

小須戸本町通り沿いの空き家の町屋「旧古川邸」を住民と作家で改装し、「町屋ラボ」としてプロジェクト実施にあたっての参加作家らの制作スペース・滞在施設として活用。建物を利用した作品展示を行ったほか、制作の様子を公開するオープンアトリエを開催。継続的な活用を図る予定。

- 7月14日(土)～10月8日(月・祝) 作品展示 (町屋ギャラリー薩摩屋、町屋ラボ、他5軒)
- 7月14日(土) 町屋ラボ内覧会・作家とめぐる作品解説ツアー (町屋ラボ他、作品展示会場)